

目次

守銭奴の遺産

5

訳者あとがき 234

解説 真田啓介 236

主要登場人物

- ジョン・リングローズ……………引退した名刑事
- ジョゼフ（ジョー）・アンブラー……………ロンドン警視庁の警部補
- メイベル・リングローズ……………ジョンの妹
- ジャーヴィス・スワン……………高利貸し
- マーティン・スワン……………ジャーヴィスの弟。農園経営者
- レジナルド・スワン……………ジャーヴィスの甥
- ジェラルディン・スワン……………ジャーヴィスの姪
- ウィリアム（ビルリー）・ボルゾーヴァー……………ジャーヴィスの秘書
- レベッカ・カースレイク……………マーティンの継娘
- ジェイムズ・カースレイク……………レベッカの夫
- ブレント……………共同住宅の管理人
- ベラ・ブレント……………ブレントの娘
- ラザラス・グラントフ……………ジャーヴィスの顧問弁護士
- トム・ラドフォード……………パプの経営者

守銭奴の遺産

第一章 守銭奴スワンの最期

イーリングの土は、このロンドン郊外の人気が高い町に住む園芸愛好家にとって、季節を問わぬ話題である。ジョン・リングローズが警察を引退し、ウインザー・ロード十九番の家を買って住み着くと、やはり土に興味を持った。薔薇を育てる住民は重い粘土質の土を欲しがり、ハイブリッド種の四季咲きとティーローズが満開になれば、リウマチの激痛も苦にしない。しかし、果物を育てているリングローズは、庭の桃とネクタリン、リング、梨がよく実り、苦勞が報われたとわかったとたん、粘土と砂利の長所を比べなくなつた。庭は家の裏手から真南に広がっている。奥行は約五十五メートルで、幅は約二十七メートルだ。東側と西側の境界で桃とネクタリンが育てられ、奥は小さなリング園になつている。イングランドの優良な品種シーイーグルとウルフリヴァアのほかに、アメリカの有名な品種もある。リングローズを尊敬するシカゴの名探偵ピーター・ガンズから送られたものだ。

リングローズは仲のいい独身の妹と同居して腰を落ち着けていたが、果物作りだけでは精力を持て余していた。運動したり、よく歩いたり、冬場は狩猟を楽しんだりして健康を保ち、親友を通じて以前の職場とたえず連絡を取り続けてもいた。あいかわらず好奇心が旺盛で、柔軟な頭を持ち、どんな難題にも取り組んだ。回顧録の売れ行きは好調であり、出版社にせかされて、早くも二冊目の執筆を考えていた。毎日、リングローズは期待と興味を胸に朝を迎えた——健全な肉体に健全な精神が宿れ

ば、必ずこうなるものだ。そのため、リングローズはさまざまな点で人生を満喫し、老いを寄せつかなかった。

「なにことも教われがわたしの信条だよ」とリングローズは親友のジョゼフ・アンブラーに言ったことがある。「人に教わり、慎重に考慮できるうちは望みがある。教わるには、聞く耳を持つことだ。いいかね。あらゆる人間の話に耳を傾けるんだ。思いもよらないときに、大ばか者が的を射た発言をするかもしれん」

アンブラー警部補は、ジョン・リングローズに言わせれば、ロンドン警視庁の若手刑事のだれより鋭敏で、前途有望だった。リングローズはいつものおおらかな態度で、わが弟子はとくに師匠を超えた、昔の自分よりはるかに有能だ、と言った。だが、当のアンブラーはごまかされなかった。力量は折り紙付きであり、成功に欠かせない自信をつけるべく自分の力を熟知していた。それでいて、何度となくリングローズの下で働いた経験から、彼は自分より優秀な師匠マスタを称賛する名人マスタだった。

「ジョンには、われわれ凡人にない奥の手があるんだ」アンブラーはこう言ってはばからない。「いつも袖口にトランプの札が一枚よけいに入ってる。その一枚が切り札さ」

リングローズは引退後にたびたびアンブラーの捜査を手伝ってきた。相手が好きなので、喜んで協力している。ふたりは無二の親友であり、これから語られる複雑きわまる謎にぶつかったときも、おたがいを理解できなくなることも、仲間意識に影を落とすこともなかった。後年、リングローズが語ったように、スワン事件でなにより驚くべき点は、彼とアンブラーが一度も深刻な口論をしなかったことだ。口論の材料に事欠かなかったにもかかわらず。

ことの始まりは、重大な出来事の始まりがそうであるように、いたって単純だった。十月初旬のす

がすがしい朝、朝食をとろうと階下に下りたリングローズはまず庭に出て、自分のためにリブストン・ピピン種のリングを一個もぎ、妹のためにジャゴネル種の梨を二個もいだ。メイベル・リングローズは兄の女性版だと言われる。結婚生活に魅力を感じたためしがなく、結婚しなくても満ち足りた人生を送っていた。

メイベルはほっそりしていて、快活で頭がよかった。ややせっかちで、兄に似て思いやりがあるが、兄のような度量を持ち合わせていない。兄より視野が狭く、公正な判断を下すのは苦手だった。メイベルはこの欠点を自覚していて、なるべく表に出さないようにしていた。

リングローズが朝食をとるかたわらで、新聞記事を読み聞かせるのがメイベルの習慣だった。兄の元の仕事に興味があり、社会性のない人間が起こした衝撃的な事件をトップニュースととらえ、刑事裁判の記事が出れば、それを読みたがった。

その朝、メイベルは早くも面白そうな記事を見つけていた。読みふけていて、梨をもいでくれた兄に礼を言わなかった。

「メリルボーンの守銭奴の事件を知っているかしら、兄さん？」メイベルは紙面から目を上げずに訊いた。

「さあな、メイベル。その男がどうした？」

「死んだわ。メリルボーンの守銭奴殺しですって」

「ほう、語呂がいいな。まあ、その男が正真正銘の守銭奴なら、死んだほうがよかつたんだ」リングローズはゆで卵の殻を割った。「守銭奴は、自分にも他人にも毒になるんだよ、メイベル」

「兄さん、聞いて。途方もない事件みたいよ」

「じゃあ、読んでくれ。面白い事件だったらありがたい。メリルボーン地区はジョー・アンブラーの管轄だからな」

メイベルは歯切れよく、芝居がかった調子で記事を読み始めた。

「メリルボーンのリンクレイター・ビルで、謎めいた事件が起こった。この煉瓦造りの大規模共同住宅では職人階級に小さな部屋を賃貸しており、入居者は独身男性が多い。メリルボーンの守銭奴の名で知られる変人は、長年四階の一室に住んでいた。共有の廊下からその部屋に入ると、ドアをあけた正面に窓が一枚あるが、それは大きな外壁に面しているうえ、ビルのどの窓からもかなり離れているため、長いはしごでも使わなにかぎり外部から侵入できない。死亡していたジャーヴィス・スワン氏はひとり暮らしであったが、秘書を一名雇っていた。このウィリアム・ボルゾーヴァーという青年は、スワン氏の下で事務を処理し、フォード車を運転して、商用で外出する雇い主の送迎もしていたという。いわば、老スワン氏の生活全般の世話をする立場であった。同氏はきわめて特異な状況下で殺害されていた。

火曜日の午後九時三十分ごろ、スワン氏はボルゾーヴァー氏の運転する車で帰宅した。ビルの管理人のブレント軍曹が、スワン氏が階段をのぼって自室へ向かう姿を目撃している。同伴者はなかったので、部屋に戻ってふだんどおり戸締りしたのは明らかだ。翌朝、軍曹はドアの外にパンとミルクを置いたが、それが正午になっても取り込まれていないことをほかの入居者から聞いた。そこでスワン氏に声をかけたが、返事がなかったという。軍曹はほかの手を打たず、夕方にスワン氏の秘書が到着するまで待った。しかし、詳細を聞いたボルゾーヴァー氏は変事があったと感じた。前夜にスワン氏を商談の場から連れ帰ったので、雇い主が紙幣及び銀で五百ポンドあまりを所持していると知ってい

たのである。ボルゾーヴァー氏の勧めで、スワン氏の弟である、ライギットの農園経営者マーティン・スワン氏に電報が打たれたが、返事がなかった。そこでブレント軍曹が警察に通報し、ボルゾーヴァー氏は、雇い主の部屋のドアはあけられないと警官たちに告げた。同氏によれば、部屋は住居というより金庫に見えるという。かねてから、スワン氏は猛攻撃に備えるかのように部屋を要塞化してきた。壁と天井は厚さ一センチ以上の鋼板で補強され、ドアも同様に防護されていて、ボルゾーヴァー氏が帰宅する際は、スワン氏が必ず玄関ドアの上部と下部とに重いポルトを差し込み、外部からの侵入を阻んでいたと思われる。

しかしながら警察は、スワン氏が発作に襲われ、予防策を取る前に死亡したと考え、まずドアをこじあげようとした。ドアには取っ手がなく、小さな鍵穴しかない。錠前は簡単に壊れたが、ドアはびくともしなかった。そこで窓が注目され、避難ばしごが運ばれて、フォレスト巡査とファルコナー巡査が地上約十八メートルの高さにある鉄格子のはまった窓までのぼった。夜も更け、ブラインドは上がっていたため、懐中電灯で闇を照らすと、部屋の中央で男がうつぶせに倒れていた。接近できなかつたが、窓を壊してから無言の人影の様子をうかがうと、意識不明であることは確認できた。三十分後に鍛冶屋が到着して、窓の鉄格子を二本切つて外した。続いてメリルボーン署のマスターズ警部補が、警察医のマシューズ医師とともに入室した。ボルゾーヴァー氏から薄暗い電灯がひとつあると聞いていた警部補は、それを灯してから死体に触れた。

ジャーヴィス・スワン氏はまぎれもなく殺害されていた。うつぶせに倒れ、重い短剣が背中を貫通して心臓に達していた。短剣は死体に刺さったままであり、それを重視した医師は、柄に触れないよう注意した。